

桐壺帝と桐壺の更衣のものがたり

いずれの時代であったか。。。

帝の側室が大勢おられたなかで、身分が高くもないのに、特別に愛された女がいた。はじめから自分こそ愛されるはずだと思っている女御たちは、彼女をおとしめそねんでいた。「めざわりな女」

低い身分の女達は、まして、穏やかでない。「どうして、あんな女と。」朝夕のお仕えの時、女同士が顔を合わせる。女達の態度に傷ついてきた。

女、桐壺の更衣は、それほどまで帝の寵愛を得て時めいているのに、気を病んで、病気がちになっていった。

あるいは、女達の恨みが積もり重なってしまったのだろうか。

彼女の心細げな様子を、「家に帰りたい」と言う様子を、帝は、ただ可愛らしいと思っていた。いとしいとだけ思って聞いていた。

帝は、彼女を家には帰さなかった。

そして、彼女を、夜だけではなく、朝も、昼も、いつもそばにおいて置いた。それは、今までの帝には例のないことだった。

うわさは広まり、政治をおろそかにする桐壺天皇の評判は悪くなっていった。帝は、大臣達の忠告も聞かなかった。

「中国では楊貴妃に惚れた玄宗皇帝が唐の国を滅ぼしたのです」というのだ。たとえ日本が滅んでも、彼女さえ、そばにいればそれでいい。

彼女は、帝の愛情だけを頼りに、他の人と付き合っていた。

女には親がいなかった。

他の女御達には、にぎやかな親戚がいて、立派な親がいて、はなやかな評判があった。女には帝だけが味方だった。

問

前世からの縁であつたらうか。

子供のない女御達も多かつたが、彼女には子供まで生まれた。

世になく清らなる玉のおのこみこ。

かわいくて、光り輝いている。

そう、それこそが、光源氏。

恐れたのは、弘徽殿（こきでん）の女御。すでに帝の後継ぎを生んでいた。

自分の子供は一番目の皇子（みこ）。次の天皇になるしきたりだ。

だが、今の帝がしきたりを破って、あの子供を跡継ぎにしたいと言い出したら、事だ。

そこで、弘徽殿の女御は、しつこく、帝に忠告を繰り返した。

うるさい。帝は弘徽殿の女御と弘徽殿の息子にはすまないと思いつつも、あたらしく生まれた御子だけを大切にした。

子供は皆にかわいがられた。

しかし逆に、彼女へのいじめはどんどんひどくなっていった。

廊下の扉を示し合わせて両側から閉めてしまう。

通り道に便壺の中身をまき、十二単（ひとえ）のすそを汚す。

帝は、いっそう、かわいそうだと思うようになり、自分の近くの部屋を彼女に与えた。しかし、一方、追い出されてしまった女の恨みはどんなだろう。

彼女の病気は重くなっていった。

「里に帰りたい」

病気がちな姿は常に目にしてきた。

帝は許さなかった。

そこでついに、彼女の母が泣きながら帝に頼んだ。
しかたがない。

問

女は今にも消え入りそうなぐったりとしたようすで寝ながら、里へ向かう車の準備を待っている。

帝は女とは行けないのだ。

泣きながら、帝は繰り返す。

「私も、限りある人生とは知っています。

あなたと、いつも、誓いましたね。

いつまでも一緒にいましょう、生まれ変わっても一緒になりましょう。と
一人だけ先に行かないでください。私を置いて行かないで。」

帝の契りを、弱った彼女は聞いただろうか

女は寝たまま、歌を詠んで応えた。

「限(かぎ)りとして別(わか)るる道(みち)の悲(かな)しきに
いかまほしきは命(いのち)なりけり」

歌の意味。限りある人生。あなたと生きてきた人生。あなたと別れることなど思いもよ
りません。こんなに悲しい道があるでしょうか。あなたと、どこまでも一緒に私はいきた
いと、思っています。あなたと生きていきたい。私の命はあなたのいのち。

それが最期だった。女は車に乗せられて行ってしまった。

夜中過ぎ帝の元に、彼女が亡くなったという知らせが届いた。